

教育研究業績書

2019年 5月 1日

氏名 山下 琢巳
学位 文学修士、教育学修士

研究分野	研究内容のキーワード	
日本文化	幕末文化史・日欧比較文化・日米比較文化	
主要担当授業科目	日本文化研究、文化史研究、伝統文化（歌舞伎入門・歌舞伎鑑賞）	
教育上の実績に関する事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
① 北区の歴史と文学を体験活動を通じて学習することに関する研究	平成14年5月1日～平成18年1月	東京都北区に関する歴史と文学を学ぶために、学生を引率して残された名所旧跡の現地調査を行い報告書を作成した。
② 東海道の変遷を日本文学と体験学習を通してたどる研究	平成19年5月～平成20年1月	東海道に関する歴史と文学を学ぶために、学生を引率して旧宿場町の現地調査を行い報告書を作成した。
2 作成した教科書・教材		
① 『初期草双紙集』	平成5年5月	江戸時代の児童読物であった絵入り草双紙を影印・翻刻・解説し大学生用テキストとしたもの。
② 『国語表現の技術』(改訂版)	平成14年4月	日本語表現に関する基本的な事項を記したもの。履歴書の書き方・面接等の実践的な学習にも役立つよう工夫がなされている。
③ 『つながる自己表現—英語と日本語』	平成20年3月	英語と日本語の二言語表現を同時に学習する形式をとる。英語と日本語の双方で論理展開を考えさせ、口頭発表のための原稿作成までのマニュアルを載せる。
3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価		
学生による授業評価アンケート（東京成徳短期大学での実施）	平成15年度～平成23年度	全担当科目において、教員の授業に臨む姿勢、教材・課題、学習効果への満足度等25項目にわたる回答（5段階評価）に対し、すべての項目において4以上の評価を受けている。

<p>学生による授業評価アンケート（東京成徳大学での実施）</p> <p>4 その他</p> <p>なし。</p>	<p>平成25年度</p>	<p>授業に対する満足度において4以上の評価を受けている。</p>
<p>職務上の実績に関する事項</p>	<p>年月日</p>	<p>概 要</p>
<p>なし。</p>		

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1. 初期草双紙集成 江戸の絵本Ⅰ	共著	昭和62年5月	国書刊行会	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の影印・翻刻・注釈・書誌・解題集。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P105～P124 青本『江島兒淵』の解題・影印・翻刻・注釈・解説。</p> <p>P125～P140 黒本『男色鑑』の解題・影印・翻刻・注釈・解説。</p> <p>(共著者：加藤康子、三好修一郎、吉村三恵子、有働裕、黒石陽子、高橋則子、勝田敏勝、小池正胤)</p>
2. 初期草双紙集成 江戸の絵本Ⅱ	共著	昭和62年11月	国書刊行会	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の影印・翻刻・注釈・書誌・解題集。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P163～P182 青本『一休和尚悟乳柑子』の解題・影印・翻刻・注釈・解説。</p> <p>(共著者：加藤康子、高橋則子、斎藤幹宏、三好修一郎、神田邦彦、丹和浩、黒石陽子、有働裕、勝田敏勝、小池正胤)</p>
3. 初期草双紙集成 江戸の絵本Ⅲ	共著	昭和63年6月	国書刊行会	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の影印・翻刻・注釈・書誌・解題集。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P61～P90 青本『阿部清明一代記』の解題・影印・翻刻・注釈・解説。</p> <p>(共著者：加藤康子、黒石陽子、三好修一郎、渡邊英信、丹和浩、斎藤幹宏、高橋則子、勝田敏勝、有働裕、小池正胤)</p>

4. 初期草双紙集成 江戸の絵本IV	共著	平成元年6月	国書刊行会	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の影印・翻刻・注釈・書誌・解題集。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P71～P90</p> <p>黒本『五衰殿熊野本地』の解題・影印・翻刻・注釈・解説。</p> <p>(共著者：加藤康子、三好修一郎、黒石陽子、鱸康幸、丹和浩、細谷敦仁、渡邊英信、高橋則子、有働裕、斎藤幹宏、小池正胤)</p>
5. 黒本・青本の研究 と用語索引	共著	平成4年2月	国書刊行会	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の総合的研究と『初期草双紙集成 江戸の絵本』I～IVの語句索引。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P93～P122</p> <p>章題「仏教長編小説と同話柄の黒本・青本 その素材と作品化をめぐる」</p> <p>江戸時代中期、夜談義の場で婦女子を対象に唱導されていた話しの、黒本・青本への影響関係を考察する。</p> <p>(共著者：加藤康子、丹和浩、有働裕、朴賛基、細谷敦仁、三好修一郎、黒石陽子、高橋則子、小池正胤、斎藤幹宏)</p>
6. 初期草双紙集	共著	平成5年5月	和泉書院	<p>(全体概要)</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本のうち代表的な10作品の解題・影印・翻刻を載せ大学用テキストとしたもの。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P54～P70</p> <p>黒本『五衰殿熊野本地』の解題・影印・翻刻。</p> <p>(共著者：加藤康子、渡邊英信、黒石陽子、小池正胤、三好修一郎、有働裕、高橋則子)</p>
7. 日本古典文学の諸相	共著	平成9年1月	勉誠社 (全717頁)	<p>(全体概要)</p> <p>元筑波大学教官桑原博史先生の退官記念論文集。韻文編・散文編・古典教育の三部よりなる。古代から近世にかけて幅広い論考を載せる。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>P633～P650</p> <p>論文名「草双紙における行基伝承—『新版／本朝／盆踊濫觴』と『行基菩薩草創記』</p> <p>江戸時代中期の絵入り児童読物であった『盆踊濫觴』(安永五年・1776・刊)に、天平僧行基の伝承がどのように取り入れられているかを、三昧聖本良とその子玄登によって、行基一千年遠忌の延享五年(1748)に出版された『行基菩薩草創記』との比較を通して考察する。</p> <p>(共著者：身崎壽、他35名)</p>

8. 草双紙事典	共著	平成18年8月	東京堂出版 (全388頁)	(全体概要) 初期草双紙である赤本・黒本・青本240作品について書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻という項目に従って解題を施す。また、草双紙の概要、草双紙書誌用語集・参考文献・索引を付す。 (担当部分概要) 24作品についての解題執筆。 (共著者：内ヶ崎有里子、有働裕、大橋里沙、鍛冶聖子、加藤康子、黒石陽子、笹本まり子、杉本紀子、高橋則子、丹和浩、橋本智子、檜山裕子、細谷敦仁、三好修一郎、ジョナサン・ミルズ、湯浅佳子)
9. Publishing the Stage	共著	2011	Center for Asian Studies University of Colorado Boulder	Keller Kimbrough & Satoko Shimazaki others 12 peoples After the opening of the country at the end of the Tokugawa period, many European and Americans arrived in Japan. While restrictions were placed upon the freedoms and mobility of most foreigners, those who were relatively free from Tokugawa government control due to their social status recorded and published texts on Japanese manners and customs that they found to be novel. My paper analyzes the way kabuki is represented in these texts from the end of the Tokugawa period to the Meiji period.
(学術論文)				
1. 『江島兒淵』について	単著	昭和59年4月	近世文学研究「叢」の会 『叢』 第7号 P1～P35	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『江島兒淵』(画作者・刊年未詳、都立中央図書館加賀文庫蔵本)の書誌・影印・翻刻・考察。 考察においては、中世末より伝承され、近世期に入って『鎌倉物語』(万治二年・1659・刊)『新編鎌倉志』(貞享二年・1685・刊)を始めとする地誌類、あるいは江戸よりの行楽であった江の島詣、さらに江の島弁財天開帳などによって広汎に流布した兒ヶ淵伝説が、この青本にどのように取り入れられているかを論じる。
2. 『新版男色鑑』について	単著	昭和60年4月	近世文学研究「叢」の会 『叢』 第8号 P131～P157	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本『男色鑑』(画作者未詳、宝暦二年・1752・刊、国立国会図書館蔵本)の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、本書が、北條団水の浮世草子『一夜船』(正徳二年・1712・刊)巻一のおよび巻一の五を直接の典拠とし、また、井原西鶴の浮世草子『男色大鑑』(貞享四年・1687・刊)巻四の三からの影響があることを指摘する。さらに本書後半部の話しの展開が、同年刊の鳥居清倍画の青本『敵討妖屋敷』と類似することを指摘する。

3. 鳥居清倍・清満と『一夜船』—浮世草子の受容について—	単著	昭和60年11月	日本近世文学会『近世文藝』第43号 P32～P48	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本・青本における浮世草子の受容について考察する。具体的には、黒本『男色鑑』(宝暦二年・1752・刊)が、北條田水の浮世草子『一夜船』(正徳二年・1712・刊) 巻一の一および巻一の五と井原西鶴の浮世草子『男色大鑑』(貞享四年・1687・刊) 巻四の三を、黒本『出雲お国芝居始』(鳥居清満画、明和二年・1765・刊)が、『一夜船』巻一の一および巻一の三を典拠とすることを指摘し、さらに西鶴の浮世草子『武道伝来期』や『西鶴織留』の影響を受けた黒本・青本を紹介して、浮世草子が草双紙の素材としてどのように生かされているかにつき論じる。
4. 『一休和尚悟乳柑子』について	単著	昭和61年3月	『昭和60年度科学研究費による「江戸時代の児童読物の中心となった赤本・黒本・青本の調査内容分析と翻刻研究」報告書』 P236～P268	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『一休和尚悟乳柑子』(鳥居清満画、安永四年・1775・刊、都立中央図書館加賀文庫蔵本)の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、本書が仮名草子『一休咄』(寛文八年・1668・刊) 所載の四十七話を取捨選択して十八話の一休逸話を扱うこと、また、本書の挿絵が、後代の山東京伝の読本の代表作のひとつとされる『本朝酔菩提』(文化六年・1809・刊)の口絵に影響を与えたことを指摘し、さらに草双紙における一休ものにも言及する。
5. 『阿部清明一代記』について	単著	昭和62年3月	『昭和61年度科学研究費による「江戸時代の児童読物の中心となった赤本・黒本・青本の調査内容分析と翻刻研究」報告書』 P203～P255	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『阿部清明一代記』(画作者・刊年未詳、国立国会図書館蔵本)の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、本書が、中世説話集『宇治拾遺物語』『東斎随筆』、中世軍記『太平記』、および林羅山の『本朝神社考』が典拠であることを指摘する。また、『安倍の安名物語』『阿部清明／芦屋道満／知恵競』『清明二本菊』『阿部清明一代記』『しのだ敵討』『信田森別一首』といった他の黒本・青本とともに草双紙における阿部清明ものの系譜をたどり、その特色について論じる。
6. 『五衰殿熊野本地』について	単著	昭和63年3月	『昭和62年度科学研究費による「江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究」報告書』 P175～P230	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『五衰殿熊野本地』(鳥居清満画、宝暦十一年・1761・刊、東洋文庫内岩崎文庫蔵本)の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、本書の上巻が、宝永頃鱗形屋孫兵衛刊の説経正本『熊野之御本地』を、中・下巻が、僧厚誉の『本朝怪談故事』巻一の十三および巻四の十六を典拠とすることを指摘する。また、室町時代物語版本および説経・古浄瑠璃正本の挿絵を年代順にたどり、本書挿絵との比較を行う。

7. 近世中期勸化本と草双紙—その影響関係について—	単著	昭和 63 年 9 月	筑波大学国語国文学会 『日本語と日本文学』 第 9 号 P27～P37	浄土宗・日蓮宗・真宗などの説教僧が夜談義の場で語った台本が、江戸時代中期の宝暦から安永にかけて盛んに刊行された。また、同時期、黒本・青本と呼ばれる絵入り草双紙も膨大に生み出された。本稿では、それらのうちで、勸化本『安倍仲麿入唐記』と青本『吉備大臣』、勸化本『泉州信田白狐伝』と青本『阿部晴明一代記』について、その影響関係を探り、因果応報譚を基軸に、和漢雅俗混淆体でしるされた仏教長編小説が、婦女子を対象とする軽文学である黒本・青本にどのように生かされているかを考察する。
8. 『殺生石水晶物語』について	単著	平成元年 2 月	『昭和 63 年度科学研究費による「江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究」報告書』 P268～P307	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『殺生石水晶物語』（画作者・刊年未詳、都立中央図書館加賀文庫蔵本）の書誌・影印・翻刻・注釈・考察。考察においては、本書が、謡曲『殺生石』を骨子として、源翁和尚一代記の体裁をとることを指摘する。また、黒本・青本『玉藻前』『殺生石』、浄瑠璃『殺生石』『玉藻前あさひ袂』、歌舞伎『玉藻前あさひ袂』『玉藻前桂黛』、勸化本『勸化白狐通』といった同時代的な作品との比較をとって本書の特徴を探る。
9. 実録的写本『悪狐三国伝』の成立について	単著	平成 2 年 6 月	溪水社 『読本研究』 第四輯上套 P114～P141	白面金毛九尾の狐が、天竺・唐土・日本をめぐる妖女と化すという物語は、文化年間にほぼ同時期に出版された『三国妖婦伝』『画本玉藻譚』というふたつの読本によって定着を見る。しかし、これらの読本に先立って流布していたのが、写本『悪狐三国伝』である。本稿では、諸本調査および内容において重複する部分を持つ勸化本『安倍仲麿入唐記』『通俗白狐通』の再版本との比較によって、この政道批判をも有する実録的写本が、寛政年間に成立した可能性を考察する。
10. 『ふゑ竹角田』について	単著	平成 2 年 7 月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第 13 号 P195～P241	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本・青本『ふゑ竹角田』（画作者・刊年未詳、中央大学国文学研究室蔵本）の書誌・影印・翻刻・注釈・考察。考察においては、本書が、江島其碩の浮世草子『都鳥妻恋笛』（享保十九年・1734・刊）に多く依拠すること、また、その他の部分的な典拠が西鶴の『好色一代男』、菊岡沾涼の『本朝俗諺志』であることを指摘し、謡曲から説教・古浄瑠璃、そして浮世草子、勸化本に流れたといった隅田川ものなかでの本書の位置付けを行う。

11. 『本朝俗諺志』— 翻刻と解題—	単著	平成3年3月	『東京成徳短期大 学紀要』 第24号 P125～P159	『本朝俗諺志』は、菊岡沾涼自身が回国して「眼前見」、あるいは江戸という地の利を生かして「他の人に委く温問」て集めた諸国の俗諺集。作者最晩年の六十七歳の時の成稿で、刊行は翌年の延享四年（1747）正月。寛保三年（1743）に刊行された『諸国里人談』の後編となる。この江戸中期の諸国奇談集は、刊行当時からよく享受され、その後も再版されて受容されていった。本稿では、この書の翻刻を行い、また解題を載せて他の分野への影響を考察する。
12. 『弥陀次郎踊大文字』について	単著	平成3年8月	『平成2年度科学研究費による草双紙研究報告書』 P334～P373	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『弥陀次郎踊大文字』（画作者・刊年未詳、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本）の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、地誌『山州名跡志』、勸化本『弥陀次郎発心伝』『中将姫行状記』『勸導簿照』等、近世期の文献にあらわれる弥陀次郎との比較を行い、本書が、婦女子向けの草双紙として宗教色の濃い弥陀次郎の事跡をどのように物語化しているかを探る。
13. 草双紙と説法談義—黒本作者の捉えた説教僧—	単著	平成4年3月	『東京成徳短期大 学紀要』 第25号 P93～P104	談義本というジャンルの先駆けとなった静観房好阿の『当世下手談義』（宝暦二年・1752・刊）は、説法談義の体裁を借りて著されており、その刊行は、非常に好評を持って江戸の読者に受け入れられた。その背景には、説法談義の花盛りという背景があった。本稿では、この同じ時期に刊行された黒本・青本『忠臣仮名書初』、黒本『料理こん立／狐のふる舞／娛伽草』、黒本『化娘／沙門大黒舞』、黒本『七小まち』、黒本『狼に衣』といった草双紙に取り上げられている談義僧や講釈師の様子を考察する。
14. 江戸中期における〈熊野の本地〉の継承と断絶—黒本・青本『五衰殿熊野本地』と勸化本『熊野権現靈驗記』をめぐって—	単著	平成4年9月	筑波大学国語国文学会 『日本語と日本文学』 第17号 P1～P13	熊野三社権現の縁起を説く〈熊野の本地〉は、熊野山伏や熊野比丘尼が活躍した室町後期から桃山時代を頂点として、南北朝期から江戸の享保末ごろまで、貴紳・庶民の関心を捉え続けてきた。しかし、この隆盛を誇った熊野信仰も、それを都市に絞ってみれば、江戸時代中期に至っては、伊勢信仰にとってかわられる。本稿では、この時期に、江戸で出版された青本・黒本『五衰殿熊野本地』と勸化本『熊野権現靈驗記』を取り上げ、〈熊野の本地〉の主要なモチーフのひとつであった女人の懐胎というテーマがどのように扱われているかを考察する。

15. 『新本朝盆踊濫觴』について	単著	平成4年10月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第15号 P172～P204	江戸時代中期の絵入り児童読物であった青本『新本朝盆踊濫觴』（鳥居清経画、安永五年・1776・刊、東京国立博物館蔵本）の書誌・影印・翻刻・注釈・考察。注釈においては、本書が、『続日本紀』の聖武天皇および行基の事跡を骨子とし、辞書『和漢三才図会』や『日本歳時記』『民間年中故事要言』といった年中行事書を参考に、『宝物集』『安斎随筆』等の説話集、『源平盛衰記』『太平記』等の軍記物、『論語』『楚辞集注』『京本音釈註解書言故事大全』等の漢籍、また『閑窓倭筆』『梨窓二筆』『行基菩薩草創記』等の仏書、さらに『枕草子春曙抄』といった古典注釈書から盆踊りの故事来歴を取り入れていることを明らかにする。
16. 胎内十月の由来— 仏書『生下未分之話』 『生下未分語』をめぐって—	単著	平成5年3月	『東京成徳短期大学紀要』 第26号 P93～P110	〈胎内十月の由来〉とは、懐胎から出産までの胎内における胎児十ヶ月間の変化を、その月々において胎児を生成・守護する「不動・釈迦・文殊・普賢・地藏・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀」という十仏の功力と、「白露・両の目・鼻・耳・出来る、口舌出来る」といったその月々の胎児の形象、あるいは「錫杖・独鈷・三鈷・鈴」といった仏具による胎児形象の比喩をもって説明するものである。 本稿では、この〈胎内十月の由来〉を最も早く載せる文献として、写本『生下未分之話』および類似の名称を持つ版本『生下未分語』について、その関係を考察する。
17. 大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵写本『三賢一致之書』について 附翻刻	単著	平成6年3月	『東京成徳短期大学紀要』 第27号 P99～P110	大龍が編した版本『三賢一致書』は、胎児十月生成の説明として一世を風靡した〈胎内十月の由来〉と、それを図式化した〈胎内十月の図〉を載せるものとして注目されてきた。しかし、その奥書によると、版本に先立って写本が存在したことがわかる。 本稿では、同じく〈胎内十月の由来〉と〈胎内十月の図〉を載せる写本『生下未分之話』および版本『生下未分語』を視野に入れ、石崎文庫蔵写本『三賢一致之書』と版本『三賢一致書』の影響関係を考察する。
18. 仲麿・吉備入唐説話を扱う黒本・青本・黄表紙五種	単著	平成6年3月	東京学芸大学国語国文学会 『学芸国語国文学』 第26号 P60～P68	大江匡房の『江談抄』には、入唐した吉備真備に、唐人より囲碁、文選、野馬台之詩と次々に難題が持ち込まれるが、これを先に入唐し高臺に閉じ込められて悶死し赤鬼となった仲麿が助けるという話しが載る。この説話は、江戸時代中期、勸化本『安倍仲麿入唐記』（誓誉作、宝暦十年・1760・序）によって広く流布する。 本稿では、勸化本と同時期に刊行された青本『吉備大臣』、黒本『きひ大臣』、黒本『勅宣養老水』、黄表紙『倭文字養老の瀧』、黄表紙『唐文章三笠の月』につき、この説話がどのように扱われているかを考察する。

19. 仲麿・吉備入唐説話を扱う黒本・青本・黄表紙四種―その書誌と翻刻―	単著	平成6年3月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第16号 P195～P241	大江匡房の『江談抄』に始まり、室町末期から江戸初期にかけて流行した「長恨歌」の注釈書『歌行詩諺解』『長恨歌詳解』、さらに仮名草子『安倍晴明物語』、勸化本『安倍仲麿入唐記』などによって広く流布した仲麿・吉備入唐説話を扱う青本『吉備大臣』（鳥居清倍画、刊年未詳、東北大学狩野文庫蔵本）、黒本『きひ大臣』（画者・刊年未詳、京都府立総合資料館蔵本）、黄表紙『倭文字養老の瀧』（富川吟雪画、安永五年・1776・刊、東洋文庫内岩崎文庫蔵本）、黄表紙『唐文章三笠の月』（鳥居清経画、安永五年・1776・刊、国立国会図書館蔵本）の書誌・翻刻・影印。
20. 『新版助読子子子子子子』について	単著	平成7年5月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第17号 P99～P119	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本『新版助読子子子子子子』（鳥居清倍・清満画、宝暦八年・1758・刊、東京大学総合図書館蔵本）の書誌・影印・翻刻・考察。 考察においては、雪舟の幼年期に筆を起こし、壮年期の諸国修行、明での画業、そして帰国後の名声を描く本書が、その骨子を『本朝画史』（狩野永納編、延宝六年・1678・序、元禄四年・1691・刊）巻三の十の雪舟伝に依拠することを明らかにし、さらに本書独自の趣向について明らかにする。
21. 彦根城博物館琴堂文庫蔵『十三佛秘中極秘之口決事』―〈胎内十月の由来〉と立川流の接点を求めて― 附翻刻	単著	平成8年3月	『東京成徳短期大学紀要』 第29号 P31～P39	早く男女陰陽の道を以て即身成仏の秘術とする真言密教の一派に立川流がある。この立川流の書籍のなかには、経典に記される胎児三十八転の説や胎内五位の説を援用して胎児生成の様子を説くものがある。彦根城博物館琴堂文庫蔵『十三佛秘中極秘之口決事』には、この立川流の教義を載せるとともに〈胎内十月の由来〉を本文に持つ。本稿では、『十三佛秘中極秘之口決事』の記述をもとに、立川流の僧侶が〈胎内十月の由来〉成立に関わった可能性について考察する。
22. 青本形態絵本『源氏』について	単著	平成8年5月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第18号 P312～P339	国立国会図書館蔵の青本形態絵本『源氏』（画者・刊年未詳）の書誌・影印・翻刻・考察。 考察においては、『絵入源氏物語』『十帖源氏』『おさな源氏』『十二源氏袖鏡』『源氏鬢鏡』『源氏小鏡』といった江戸時代前期に刊行された絵入りの「源氏」注釈書・梗概書・絵本の挿絵、また、奥村政信画「源氏五十四帖」や西村重長・二代鳥居清倍画「げんじ五十四まい」等の「源氏」を素材とした浮世絵と、本書挿絵との比較を行い、その影響関係を探るとともに、その独自性について論じる。

23. 阿部仲麿入唐説話—その近世的変容をめぐって—	単著	平成8年5月	東京大学国語国文学会 『國語と國文学』 第73巻5号 P31～P40	「あまのはらふりさけみればかすがなるみかさのやまにいでしつきかも」の歌は、『古今集』詞書によれば、仲麿が、日本からの使節団とともに帰朝するおり、遙かな祖国を想って、明州の海岸で詠んだものとされており、名歌の誉れが高い。しかし、『江談抄』では、帰朝しなかった者の歌は「不快」なりとして、併せて仲麿が唐人に楼上に閉じ込められて餓死したという話しを載せる。古来、仲麿に対する評価は、正負半ばする。本稿では、近世期を通してに展開された仲麿入唐説話において、仲麿がどのように描かれ評価されているかを考察する。
24. 黒本『新版男色北野梅』の書誌と翻刻—附男色物初期草双紙について—	単著	平成9年6月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第19号 P86～P408	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本『新版男色北野梅』（丈阿作、画者未詳、明和二年・1764・刊、東洋文庫内岩崎文庫蔵本）の書誌・影印・翻刻・考察。考察においては、本書をはじめ黒本『男色鑑』（鳥居清倍画、宝暦二年・1752・刊）、黒本『男色狐敵討』（鳥居清倍・清満画、宝暦六年刊）、黒本・青本『男色太平記』（鳥居清満画、明和三年刊）といった男色を扱った草双紙四作品を取り上げ、男色なやや下火になったと考えられる江戸時代中期において、男色というものがどのように描かれているかを探る。
25. 真言立川流と室町時代物語—『大仏供養物語』の真言宗記述をめぐって—	単著	平成10年3月	『東京成徳短期大学紀要』 第31号 P29～P38	立川流の教理は、天地の森羅万象を金剛界と胎藏界、阿と吽、理と智に分けて、それぞれに男女両性を配して大日如来にあて、男女交合をもって即身成仏の秘法とし、煩惱即菩提の極致であると説く。『大仏供養物語』は、源平の戦いで焼失した東大寺の再興にまつわる物語であるが、大仏供養の日に説法に呼ばれた法然上人が説く真言教義には、正流の側からすれば異端ともとれる主張が含まれる。本稿においては、この記述部分への立川流の影響の有無について考察する。
26. 黄表紙『唐倭画伝鑑』の書誌・翻刻・注釈	単著	平成10年6月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第20号 P139～P167	和漢の著名な絵師、雪舟・巨勢金岡・狩野元信・顧愷子・張僧繇・陸堅・揚子華・顧光宝・景山・張衡・馬遠の絵による奇瑞を学術的に記した恋川春町作画の黄表紙『唐倭画伝鑑』（安永五年・1776・刊、国立国会図書館蔵本）の書誌・影印・翻刻・注釈。本書の表紙・外題・柱刻・寸法・紙数・画作者・板元・刊記等の書誌を記し、正確な翻字を行って、注釈においては、人名・地名等五十七の語句に詳細な註を施して、その典拠を明らかにする。

27. 『勸化五衰殿附録』 —江戸中期説教僧の 捉えた〈熊野の本地〉 —	単著	平成 11 年 3 月	『東京成徳短期大 学紀要』 第 32 号 P55～P67	南北朝期成立の『神道集』に初見する熊野三社権現の由来を説く〈熊野の本地〉は、熊野山伏や熊野比丘尼が活躍した室町後期から江戸時代初期にかけて絵巻・奈良絵本・写本として行われ最も興隆を見る。そしてそれは、なお衰えない熊野信仰を背景として説経浄瑠璃・古経浄瑠璃に取り入れられ正本という形で享保頃まで命脈を保ち続けていく。その後、江戸という都市に限っていえば、熊野信仰は富士信仰や伊勢信仰にその座を明け渡すこととなるが、宝暦年間に入って僧誓誉の『勸化五衰殿』『勸化五衰殿附録』が刊行される。このうち『勸化五衰殿附録』には、〈熊野の本地〉に対する作者の評言が記されている。本稿では、この評言に基づいて、江戸時代中期に、〈熊野の本地〉がどのように受容されていたかを読み解く。
28. 赤本・黒本・青本 解題集（一）	共著	平成 11 年 6 月	近世文学研究「叢 の会 『叢 草双紙の翻 刻と研究』 第 21 号 P274～P304	（全体概要） 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 （担当部分概要） 『江嶋兒淵』『五衰殿熊野本地』『悟乳柑子』『男色鑑』『男色狐敵討』『男色北野梅』の解題担当。 （共著者：有働裕、加藤康子、黒石陽子、高橋則子、丹和浩、三好修一郎）
29. 中世古今注所載 〈五輪五仏和歌同体〉 説一人丸歌「ほのぼの と」と〈胎内五位〉図	単著	平成 12 年 3 月	『東京成徳短期大 学紀要』 第 33 号 P17～P36	〈胎内五位図〉とは、『俱舎論』第九巻の胎内五位説を本説とし、胎児の変化を羯頼藍位・ア部曇位・閻尸位・健南位・鉢羅奢?位の五段階に分け、これに円形・三日月形・三胡形・五輪塔・人形の図をあて、さらにそれぞれに五智・五仏・五方・五転を配して説明を加えるものである。この〈胎内五位図〉は、立川流とされる書に散見するが、この秘説は、南北朝期、古今注の世界において文学と融合する。そして、『和歌古今灌頂卷』等の中世古今注では、この〈胎内五位図〉は、柿本人丸の詠歌とされる「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」の解釈として附会されるというかたちで用いられる。 本稿では、〈胎内五位図〉が中世古今注の世界においてはどのように扱われているのかを考察する。

30. 赤本・黒本・青本 解題集 (二)	共著	平成 12 年 6 月	近世文学研究「叢」 の会 『叢 草双紙の翻 刻と研究』 第 22 号 P245～P281	(全体概要) 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青 本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複 製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 (担当部分概要) 『吉備大臣』『きひ大臣』『唐文章三笠の月』『倭文字養 老の瀧』の解題担当。 (共著者：内ヶ崎有里子、有働裕、加藤康子、黒石陽子、 杉本紀子、高橋則子、丹和浩、檜山裕子、細谷敦仁、三 好修一郎)
31. 近世「聖徳太子伝 暦注」所載〈懐胎十月 の説〉考—『耆婆五臓 論』の説と「十月懐胎 三十八転」の説をめぐ って—	単著	平成 13 年 3 月	『東京成徳短期大 学紀要』 第 34 号 P11～P27	一〇世紀に成立したとされる『聖徳太子伝暦』の記すと ころによれば、太子は、在胎八箇月を経たとき、胎内 において言を発したという。近世期の「聖徳太子伝暦注」 諸書には、この部分の注として〈懐胎十月の説〉が記さ れ、そこには、『耆婆五臓論』の説と「十月懐胎三十八 転」の説が引用される。近世「聖徳太子伝暦注」におけ る〈懐胎十月の説〉は、何故に〈胎内五位図〉あるいは 当時盛行した〈胎内十月の由来〉ではなく『耆婆五臓論』 の説と「十月懐胎三十八転」の説によってなされるのか。 そもそも『耆婆五臓論』の説とはなにを本説とするのか。 本稿では、このことにつき考察する。
32. 『武道伝来記』の 一章をめぐっての雑 感	単著	平成 13 年 6 月	ペリかん社 『江戸文学』 第 23 号 P74～P77	井原西鶴の浮世草子『武道伝来記』（貞享四年・1687・刊）は、古今の敵討ちを集めたものとして知られて いる。しかしながら、その巻一の二には、殿の愛着が他 の女性に移り、毒殺をはかった小梅という女性の処罰譚 が大きくクローズアップして描かれる。本稿では、西鶴 が常軌を逸脱した異常な人の行動をどのように描いた につき、本章を視座に据えて、『男色大鏡』『西鶴諸国は なし』『本朝二十不孝』の数章をも視野に入れながら考 察する。
33. 赤本・黒本・青本 解題集 (三)	共著	平成 14 年 3 月	平成10年度～平成 13 年度科学研究費 補助金(基盤研究C 1) 研究成果報告 書 『初期草双紙の翻 刻・内容分析によ る近世期の子供の 文化の研究』 P179～P211	(全体概要) 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青 本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複 製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 (担当部分概要) 『哥占伝』『盆踊濫觴』『五衰殿熊野本地』の解題担当。 (共著者：有働裕、加藤康子、黒石陽子、杉本紀子、高 橋則子、丹和浩、細谷敦仁、三好修一郎、湯浅佳子)

34. 中国目連戯〈懐胎十月の歌〉考	単著	平成 14 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』 第 35 号 P19～P34	『仏説孟蘭盆経』の記すところに拠れば、釈迦の十大弟子の一人である目連は始めて六通を得たとき、死んだ母が餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを見出し、仏の教えに従って、七月十五日の自恣の日に僧達を供養して、母を餓鬼の苦から救ったという。この〈目連救母〉譚は、宋代に雑劇として取り上げられて以来、金の院本の題目ともなり、明代には、湖南や江南地方を中心に〈目連戯〉として広く流传していく。この〈目連戯〉において、目連の母青提夫人は、血湖の池畔で、「十月懐胎の苦」を七言歌にした〈十月懐胎の歌〉を蹲って大声をあげて泣きながら唱う。そして、この歌には、なぜか、月毎の胎児生成の様子が歌い込まれている。本稿では、最近の〈目連戯〉研究成果に基づき、その胎児生成の部分に焦点を据えて、〈十月懐胎の歌〉について考察する。
35. 時代小説前史—江戸時代の伊達騒動ものを視座として	単著	平成 14 年 11 月	學燈社 『国文学 解釈と教材の研究』 第 47 卷 13 号 P18～P22	日本の大衆小説は、二代目松林伯円の速記講談に起源を發し、二代目玉田玉秀斎を中心とした創作集団による書き講談を経て、大正十年代に講談の様式と題材を借りて書き下ろされた新講談、そして文芸読物の登場によって確立する。この確立期の大衆小説は、そのほとんどが、講談種による時代小説であった。江戸時代に近代の時代小説と同様の位置を占めたのが、実録体小説である。本稿では、伊達騒動もの実録体小説を軸に据えて、時代小説との相違点・共通点を考察する。
36. 赤本・黒本・青本 解題集 (四)	共著	平成 15 年 2 月	近世文学研究「叢」の会 『叢 草双紙の翻刻と研究』 第 24 号 P325～P348	(全体概要) 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 (担当部分概要) 『殺生石水晶物語』の解題担当。 (共著者:内ヶ崎有里子、有働裕、加藤康子、黒石陽子、高橋則子、丹和浩、細谷敦仁、三好修一郎、湯浅佳子)
37. 高井蘭山編『女重宝記』所載〈胎内十月の図〉考	単著	平成 15 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』 第 36 号 P19～P31	江戸時代も終焉に近づいた弘化四年(1847)の初春、江戸の書肆和泉屋金右衛門から『絵入日用女重宝記』五卷五冊が刊行された。婦女子の心がけるべき嗜みや教養を、絵入りの平易な文によって説く。高井蘭山による編輯で、葛飾応為が挿絵を描く。元禄版『女重宝記』三之巻は、「くわいにんの巻」として、お産と産後の養生を説くが、その三ノ一には、胎児生成の様子を図示する〈胎内十月の図〉とその説明である〈胎内十月の由来〉が載る。このふたつは、当時の宗教的信仰を劇化した説経・古浄瑠璃でも語られて、一世を風靡したものであった。蘭学の導入によって、産科も日進月歩を遂げていた時期において、蘭山は、元禄版『女重宝記』に記された〈胎内十月の図〉をどのように扱っているのかにつき本稿では考察する。

38. 赤本・黒本・青本 解題集（五）	共著	平成 16 年 2 月	近世文学研究「叢」 の会 『叢 草双紙の翻 刻と研究』 第 25 号 P307～P347	〈全体概要〉 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 〈担当部分概要〉 『踊大文字』『源氏』『子子子子子子』『箆管隅田川』の解題担当。 〈共著者：有働裕、加藤康子、黒石陽子、高橋則子、丹和浩、細谷敦仁、鍛冶聖子、桧山裕子、Jonathan MILLS〉
39. 本学蔵北区関係浮世絵—学生にその歴史的意義を学んでもらう—	単著	平成 16 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』 第 37 号 P1～P16	現北区は、かつて江戸の北郊にあつて、飛鳥山や滝野川という地を擁して、江戸後期には、歓楽地として非常な賑わいを見せた。そのために描かれた浮世絵の数も、他の地域に比べて圧倒的な数を誇る。現存する北区関係の浮世絵は、画題を異にするものにして優に三百種を超える。本稿は、本学が所蔵する北区関係の浮世絵 30 種についての解説で、浮世絵を使用して授業を行うにあたって作成した資料を纏めたもの。「北区の歴史と文学を体験学習を通じて学習することに関する研究」(平成 14・15 年度文科省私立大学教育研究高度化推進特別補助「高等教育研究改革推進経費」) 報告書。
40. 腹帯習俗と勸化本	単著	平成 16 年 4 月	『國文學 解釈と教材の研究』 第 49 巻 5 号 P102～P105	腹帯は、平安時代、宮中のお産儀礼のひとつとして始まり、その後、武家社会にも浸透していく。一般庶民に広まりはじめるのは、江戸時代前期からで、江戸時代中期になると、妊婦が妊娠五ヶ月目に腹帯を巻くことの効用が、一般子女を聴衆とする夜談義の場で説かれるようになる。そこでは、腹帯の効用が、どのように説かれていたかを、唱導の台本ともされた勸化本『勸化五衰殿』『勸化五衰殿附録』について探り、腹帯習俗が安産信仰として定着していく過程を考察する。
41. ヴェネチア東洋美術館所蔵日本書籍及び関連資料目録	共著	平成 16 年 11 月	『調査研究報告』 第 25 号 P139～P172	〈全体概要〉 ヴェネチア東洋美術館に所蔵される、日本書籍及びその関連資料を、書名・書名読み（ローマ字表記）・請求番号（旧請求番号）・存欠等・刊／写の別・冊数・著者・画工・寸法・紙数・刊年・刊行地・版元・序跋・備考の順に記す。 平成 15 年度科学研究費補助金「在欧日本古典籍に関する日仏伊共同学術調査—19 世紀以降の和書移動とヨーロッパ東洋学との関連を含めて—」（基盤研究（A）（2）課題番号 15251003）の報告書。 〈共著者：山下則子、ラウラ・モレッティ〉

42. 赤本・黒本・青本 解題集 (六)	共著	平成 17 年 2 月	近世文学研究「叢」 の会 『叢 草双紙の翻 刻と研究』 第 25 号 P249～P287	(全体概要) 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の解題集。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 (担当部分概要) 『近江国犬神物語』『狼に衣』『手孕村昔語』の解題担当。 (共著者:内ヶ崎有里子、大橋里沙、有働裕、加藤康子、黒石陽子、高橋則子、丹和浩、細谷敦仁、桧山裕子、笹本まり子、杉本紀子、三好修一郎、湯浅佳子)
43. 修験道〈五體本有 本来佛身〉説 —その教理としての 〈胎内五位〉とその展 開—	単著	平成 17 年 3 月	『東京成徳短期大 学紀要』 第 38 号 P21～P32	修験道において峰中で重んじられる修行法に、十界修行がある。この終業法は、胎内修行とも呼ばれ、修行者は、儀礼によって死者となった後、峰中でふたたび一人の人として新たに自己を形成していく過程が、母胎内での成長に擬せられる。修験道の教義書では、修行者が擬死の後、胎児として新たな生命を受胎し、やがて成長して出産に至る過程に、〈胎内五位〉が、秘説として用いられる。本稿では、経典『具舍論』に出る〈胎内五位〉が、修験道の教理として、どのように取り込まれ、時代の推移とともに展開していくのかを考察する。
44. 『日本書紀』注所載 〈懐胎十月の説〉考— 『日本書紀神代合解』 を視座として—	単著	平成 18 年 3 月	『東京成徳短期大 学紀要』 第 39 号 P1～P11	寛文四年(1664)刊行の『日本書紀神代合解』には、忌部正通「神代巻口訣」、一条兼良「日本書紀纂疏」、卜部兼俱「日本書紀神代巻抄」、清原宣賢「日本書紀抄」といった中世の代表的な『日本書紀』注釈書の説が引用される。本稿では、『日本書紀』神代の巻、伊弉諾尊と伊弉冉尊の国生み神話に関して、これらの注釈書が、どのような解釈をしているのか、また、そこに懐胎から出産にいたる人の胎児十ヶ月の様子を記す〈懐胎十月の説〉が、なぜ引用されるのかについて考察する。
45. ナポリ国立図書館 ルッケージ・パツリ文 庫所蔵日本古典籍目 録	共著	平成 18 年 3 月	『調査研究報告』 第 26 号 P144～P164	(全体概要) ナポリ国立図書館ルッケージ・パツリ文庫に所蔵される古典籍を、書名・書名読み(ローマ字表記)・請求番号・刊/写の別・冊数・著者・画工・寸法・紙数・刊年・刊行地・版元・存欠等・序跋・備考の順に記す。 平成 16・17 年度科学研究費補助金「在欧日本古典籍に関する日仏伊共同学術調査—19 世紀以降の和書移動とヨーロッパ東洋学との関連を含めて—」(基盤研究(A)(2) 課題番号 15251003)の報告書。 (共著者:山下則子、和田恭幸、ロベルタ・ストリッポリ)

46.江戸時代初期草双紙の特色解明のためのデータ集積による集成的研究	共著	平 18 年 3 月	『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究C1）研究成果報告書』 P9～P108	（全体概要） 江戸時代中期の絵入り児童読物であった赤本・黒本・青本の解題部分担当。一作品につき書誌・内容・典拠・特色・複製・翻刻・参考文献という項目に従って記す。 （担当部分概要） 8作品の解題担当。 （共著者：黒石陽子（研究代表者）、内ヶ崎有里子、有働裕、加藤康子、高橋則子、三好修一郎、湯浅佳子）
47. 口伝秘説の掟—浅井了意と漢籍所載〈胎内生成論〉をめぐって—	単著	平成19年3月	『東京成徳短期大学紀要』 40号 P13～P22	延宝六年（1678）の自序を持つ浅井了意の『聖徳太子伝暦備講』巻二ノ二三「十月胎形付三十八箇七日」には、それまでの『聖徳太子伝暦』注釈とは異なる〈十月胎形説〉が載る。従来の注釈には、医書『耆婆五臟論』と仏書『瑜伽論』の説が引用されるが、了意は、明代後半に福建省建陽で盛んに出版された「通俗的日用類書」に見える説を引用する。〈十月胎形説〉は、中世注釈以来、よく利用された類書『太平御覧』に『文子』と『淮南子』の説が見える。本稿では、「太子伝注釈」に、『文子』『淮南子』の説が用いられなかった理由、また、了意が、新説を引用した理由について考察する。
48. 道教と〈胎〉—『雲笈七籤』所載〈胎内生成論〉を中心として—	単著	平成20年3月	『東京成徳短期大学紀要』 41号 P1～P9	北宋の張君房が撰した道教の類書『雲笈七籤』巻二十九「稟受章」には、『内観経』『因縁経』『太上九丹上化胎精中記』からの三つの〈十月胎形説〉が載る。中国では、早くから、人としての生を受けた後、どのように母胎で十ヶ月成長するかにつき医書、思想書、易書などに記され、それは、中国撰述の民衆教典や民衆劇（目連戯）のなかにも見える。そういった〈十月胎形説〉と道教の説の相違を比較し、その説には、道教独自の長生不老術と胎児を神聖視する思想が反映したものであることを考察する。
49. 本学蔵東海道関係浮世絵（一）—教材としての浮世絵へのイントロダクション—	単著	平成21年3月	『東京成徳短期大学紀要』 42号 P135～P144	イギリス人アーネスト・サトウが、1862年（文久2年）から1869年（明治2年）にかけて日本滞在中の日記をもとに後年出版した『一外交官の見た明治維新』（1921）において、幕末の東海道とその旅が、どのように描かれているかを、「参勤交代制度」「伊勢神宮参詣」「道中記・名所記・地図」「浮世絵」「東海道中膝栗毛」「徒歩の旅」などをキーワードにして考察する。また、江戸後期に出された東海道関係の揃物浮世絵十八種について、シリーズ名・揃い枚数・判型・版元・刊行年・俗称などを紹介する。
50. 本学蔵東海道関係浮世絵（二）—日本橋界限—	単著	平成22年3月	『東京成徳短期大学紀要』 43号 P47～p65	スイス人エメュ・アンペールの『幕末日本図絵』（1870）において、幕末の東海道とその旅が、どのように描かれているかを、「参勤交代制度」「伊勢神宮参詣」「道中記・名所記・地図」「浮世絵」「東海道中膝栗毛」「徒歩の旅」などをキーワードにして考察する。また、江戸後期に出された東海道関係の揃物浮世絵十二種について、シリーズ名・揃い枚数・判型・版元・刊行年・俗称などを紹介する。

51. 本学蔵東海道関係 浮世絵(三)ー日本橋 から品川宿ー	単著	平成23年3月	『東京成徳短期大 学紀要』 44号 P53～p73	イギリス人ローレンス・オリファントの『エルギン伯使 節団の物語』(1859)、およびイギリス人ラザフォード・ オールコックの『大君の都』(1863)において、幕末の 東海道とその旅が、どのように描かれているかを、「参 勤交代制度」「伊勢神宮参詣」「道中記・名所記・地図」 「浮世絵」「東海道中膝栗毛」「徒歩の旅」などをキー ワードにして考察する。また、江戸後期に出された東海 道関係の揃物浮世絵十種について、シリーズ名・揃い枚 数・判型・版元・刊行年・俗称などを紹介する。
52. 幕末滞在欧米人と王 子稲荷	単著	平成23年3月	『朱』 54号 P163～p173	イギリス人アーネスト・サトウの『中央部・北部日本旅 行案内』(1881)、イギリス人ローレンス・オリファント の『エルギン伯使節団の物語』(1859)、およびスイ ス人エメエ・アンペールの『幕末日本図絵』(1870)に おいて、幕末の王子稲荷が、どのように描かれているか を探る。
53. 本学蔵東海道関係 浮世絵(四)ー川崎宿 および神奈川宿界限 ー	単著	平成24年3月	『東京成徳短期大 学紀要』 45号 P1～p23	イギリス人ロバート・フォーチュンの『江戸と北京』 (1863)において、幕末の東海道とその旅が、どのよう に描かれているかを、「参勤交代制度」「伊勢神宮参詣」 「道中記・名所記・地図」「浮世絵」「東海道中膝栗毛」 「徒歩の旅」などをキーワードにして考察する。また、 江戸後期に出された東海道関係の揃物浮世絵六種につ いて、シリーズ名・揃い枚数・判型・版元・刊行年・俗 称などを紹介する。
54. 高井蘭山『淫事養 生解』と中国日用類 書ー「十月胎形図 説」をめぐってー	単著	平成25年8月	『和漢比較文学シ ンポジウム2013予 稿集』 P38～p43	高井蘭山の『淫事養生解』(文化12年・1815・刊)の11 条に掲載される「胎内十月形成図」について、医書『耆 婆五臟論』、中国日用類書所載の「十月胎形図説」との 比較を行い、その依拠したところを明らかにする。
55. ハリスと東海道 (1)ーヒュースケン 日記とともにー	単著	平成25年3月	『東京成徳大学研 究紀要』 20号 P55～p77	ハリスとヒュースケンの日記をもとにして、下田から三 島までの下田街道の様子を簡略にたどるとともに、三島 から箱根関所にかけての幕末期の東海道とその施設を、 彼らが、どのようにとらえたかを考察する。
56. ハリスと東海道 (2)ーヒュースケン 日記とともにー	単著	平成26年3月	『東京成徳大学研 究紀要』 21号 P99～p116	ハリスとヒュースケンの日記をもとにして、箱根東坂か ら藤沢にかけての幕末期の東海道とその施設を、彼ら が、どのようにとらえたかを、日本側の記録との比較を とおして考察する。
57. ハリスと東海道 (3)ーヒュースケン 日記とともにー	単著	平成27年3月	『東京成徳大学研 究紀要』 22号 P97～p115	ハリスとヒュースケンの日記をもとにして、藤沢から川 崎にかけての幕末期の東海道とその施設を、彼らが、ど のようにとらえたかを、日本側の記録との比較をとおし て考察する。

58. ハリスと東海道 (4) —ヒュースケン 日記とともに—	単著	平成 28 年 3 月	『東京成徳大学研究紀要』 23 号 P113～p130	ハリスが、川崎宿で追想したペリー艦隊の従軍牧師ビッチンガーの神奈川宿から川崎宿までの単独移動という一件について考察する。
59. ハリスと東海道 (5) —ヒュースケン 日記とともに—	単著	平成 29 年 3 月	『東京成徳大学研究紀要』 24 号 P95～p112	ハリスが川崎宿で迎えた 11 月 29 日は、キリスト教徒にとっての安息日で、それも降臨節における第一日曜日であった。ハリスは、出府にあたって江戸入府の前日の安息日をビッチンガー牧師ゆかりの地である川崎で迎えるという日取りを立て、それを幕府に承認させていた。本稿では、ハリスが、川崎宿での安息日をどのように過ごしたのか、また、なぜ入府の前日に安息日がかかるような日程を立てたのかについて考察する。
60. ハリスと東海道 (6) —ヒュースケン 日記とともに—	単著	平成 30 年 3 月	『東京成徳大学研究紀要』 25 号 P13～p33	1857 年 11 月 28 日と 29 日、ハリスは川崎宿の民間の宿屋である万年屋で宿泊する。このハリスとヒュースケンが宿泊した万年屋について、その後、西欧人が残した記述についてたどる。
61. ハリスと東海道 (7) —ヒュースケン 日記とともに—	単著	平成 31 年 3 月	『東京成徳大学研究紀要』 26 号 P19～P39	1857 年 11 月 28 日と 29 日、ハリスは川崎宿の民間の宿屋である万年屋で宿泊する。29 日の午後、ハリスとヒュースケンは川崎大師を訪れる。このことにつきふたりの日記をたどるとともに、その後、この川崎大師を訪れた西欧人の残した記述についても触れる。
(その他)				
1. 『日本架空伝承人名事典』	共著	昭和 61 年 9 月	平凡社	編集協力
2. 『学習古語辞典』	共著	平成 7 年	講談社	近世文学史関係の項目
3. 『世界人物逸話大事典』	共著	平成 7 年	角川書店	近世期の人物についての数項目
4. 学会時評	単著	平成 7 年 12 月	全国大学国語国文学会 『文学・語学』 P10～P11	平成 6 年度に発表された草双紙に関する研究書・論文にたいする時評。
5. 『日本古典文学研究史大事典』	共著	平成 9 年	勉誠社	「勸化本」の項執筆。
6. みちのものがたり	共著	平成 29 年 8 月 26 日	『朝日新聞』	記事作成協力、本文中に大学名と名前あり。
(口頭発表)				

1. 鳥居清倍・清満と『一夜船』－浮世草子の受容について－	単著	昭和59年11月	日本近世文学会 第67回大会	江戸時代中期の絵入り児童読物であった黒本・青本における浮世草子の受容についての発表。 具体的には、黒本『男色鑑』（宝暦二年・1752・刊）が、北條団水の浮世草子『一夜船』（正徳二年・1712・刊）巻一のおよび巻一の五と井原西鶴の浮世草子『男色大鑑』（貞享四年・1687・刊）巻四の三を、黒本『出雲お国芝居始』（鳥居清満画、明和二年・1765・刊）が、『一夜船』巻一のおよび巻一の三を典拠とすることを指摘し、さらに西鶴の浮世草子『武道伝来期』や『西鶴織留』の影響を受けた黒本・青本を紹介して、浮世草子が草双紙の素材としてどのように生かされているかにつき発表を行った。
2. 実録的写本『悪狐三国伝』の成立について	単著	平成元年6月	日本近世文学会 第76回大会	白面金毛九尾の狐が、天竺・唐土・日本をめぐり妖女と化すという物語は、文化年間にほぼ同時期に出版された『三国妖婦伝』『画本玉藻譚』というふたつの読本によって定着を見る。しかし、これらの読本に先立って流布していたのが、写本『悪狐三国伝』である。本稿では、諸本調査および内容において重複する部分を持つ勸化本『安倍仲磨入唐記』『通俗白狐通』の再版本との比較によって、この政道批判をも有する実録的写本が、寛政年間に成立した可能性について発表を行った。
3. 江戸中期の熊野唱導－『勸化五衰殿』『勸化五衰殿附録』をめぐる－	単著	平成3年9月	筑波大学国語国文学会 第15回大会	南北朝期成立の『神道集』に初見する熊野三社権現の由来を説く〈熊野の本地〉は、熊野山伏や熊野比丘尼が活躍した室町後期から江戸時代初期にかけて絵巻・奈良絵本・写本として行われ最も興隆を見る。そしてそれは、なお衰えない熊野信仰を背景として説経浄瑠璃・古経浄瑠璃に取り入れられ正本という形で享保頃まで命脈を保ち続けていく。その後、江戸という都市に限っていえば、熊野信仰は富士信仰や伊勢信仰にその座を明け渡すこととなるが、宝暦年間に入って僧誓誉の『勸化五衰殿』『勸化五衰殿附録』が刊行される。この二書に基づいて、江戸時代中期に、〈熊野の本地〉がどのように受容されていたかにつき発表を行った。
4. 〈胎内十月の由来〉の始源を求めて	単著	平成6年11月	日本近世文学会 第87回大会	〈胎内十月の由来〉とは、懐胎から出産までの胎内における胎児十ヶ月間の変化を、その月々において胎児を生成・守護する「不動・釈迦・文殊・普賢・地藏・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀」という十仏の功力と、「白露・両の目・鼻・耳・出来る、口舌出来る」といったその月々の胎児の形象、あるいは「錫杖・独鈷・三鈷・鈴」といった仏具による胎児形象の比喩をもって説明するものである。この〈胎内十月の由来〉を最も早く載せる文献として、写本『生下未分の話』および類似の名称を持つ版本『生下未分語』について発表を行った。

5. Kabuki in Late Nineteenth-Century European and American Publications	単著	March 2011	University of Colorado Boulder	After the opening of the country at the end of the Tokugawa period, many European and Americans arrived in Japan. While restrictions were placed upon the freedoms and mobility of most foreigners, those who were relatively free from Tokugawa government control due to their social status recorded and published texts on Japanese manners and customs that they found to be novel. My paper analyzes the way kabuki is represented in these texts from the end of the Tokugawa period to the Meiji period.
6. 高井蘭山『淫事養生解』と中国日用類書 - 「十月胎形図説」をめぐって-	単著	平成 25 年 8 月	和漢比較文学会第 6 回特別例会 於中国西安大学	高井蘭山の『淫事養生解』（文化 12 年・1815・刊）の 11 条に掲載される「胎内十月形成図」について、医書『耆婆五臟論』、中国日用類書所載の「十月胎形図説」との比較を行い、その依拠したところを明らかにした。
7. 十三仏供養と「十月胎形図説」	単著	平成 25 年 9 月	日中韓シンポジウム 於中国華僑大学泉州キャンパス	十三仏信仰と「十月胎形図説」の関係について、日本、中国、韓国での資料をもとに、シンポジウムの一員として、コメントを行った。
(公開講座・講演)				
1. 『西鶴諸国ばなし』巻 1—3 「大晦日はあはぬ算用」	単著	平成 25 年 10 月	本学平成 25 年度一般公開講座	井原西鶴の『西鶴諸国ばなし』巻 1—3 「大晦日はあはぬ算用」の読みについて、太宰治の『新釈諸国噺』 「貧の意地」との比較をとおして講演を行った。
2. 歌舞伎講座	単著	平成 25 年 11 月～12 月	船橋市小室公民館公開講座	歌舞伎の基礎知識と鑑賞法について、3 回にわたって、講座を受け持った。
3. 天保期の娘義太夫	単著	平成 25 年 11 月	本学「古典の日記念日本伝統文化学科講演会・演奏会」	日本伝統文化学科主催の「古典の日記念日本伝統文化学科講演会・演奏会」において、江戸天保期の女義太夫の一側面について講演を行った。